

舞鶴市糸井文庫蔵『新春 龍宮物語』 新春の寿ぎと浦島伝説 付、翻刻

畑 恵里子

一 はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『新春 龍宮物語（しんしゅん たつのみやこものがたり）』を対象として、浦島伝説の享受史における本作品の特徴をごく簡易に整理したものである。本書の現在の所有者は舞鶴市、データベースは立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ARCと表記する）による。

本書には、浦島伝説はほとんど用いられていないのだが、「龍宮」「浦島」「乙姫」という言葉は記されていることから、二次創作に相当すると考えられる。舞台は「龍宮」であるのだが、浦島伝説の登場人物などが再登場するというわけではなく、本伝説の枠組を援用しているという印象が持たれる作品である。

二 書誌情報

舞鶴市糸井文庫について簡易に触れておく。

本文庫は一九四九年より舞鶴市指定文化財とされている。京都府北部を舞台としていた大江山・浦島・山椒（山庄）大夫などに関する、近世から明治期の資料が、集中的におさめられている点が特徴のひとつとされている。

本文庫を分類した舞鶴市糸井文庫の目録にあたる『丹後郷土資料館目録』では、『新春 龍宮物語』を、黄表紙・合巻のカテゴリ、特に江戸文永堂の合巻に位置づけていて、作者は為永春水、作画は歌川国直、天保一五年板行と整理している（注一）。現在、糸井文庫は舞鶴市の管轄下にあるのだが、本来の所有者は糸井仙之助であり、本目録の作成者も同氏である（一八七四〜一九四九年）。京都府与謝郡出身、故郷である丹後地域にゆかりの古典籍を蒐集した実業家であった。後に、本文庫を舞鶴市が管理するようになったという（注二）。

ARCのデータベースである「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」では、本書を黄表紙・合巻とする（注三）。作は為永春水、画は歌川国直、判型は中本（一八・六×一三・七センチ）、巻冊は一冊、刊行年は天保一五（一八四四）年、制作は大島屋 伝衛門としている。本データベースの書誌情報では、さらに次のように説明している（注四）。

丁付はノドに有り。序年誌には「辰の春」とあり。表紙が従来のような錦絵摺付表紙でなく、地味な表紙となっていることから考えて、天保の改革の施行以降の刊行と思われる。従って、本書の刊行は天保十五年（甲辰）と推定される。

ARCの指摘通り、表紙に彩色はない。龍宮と宝珠とがあしらわれていて、浦島伝説を想起させる図柄であり、作画者の名前が左下に大きく記載されている。

三 『新春 龍宮物語』の「春」「正月」による寿ぎ

左は、見返に見られる新春の寿ぎである。

①年のうちに春來にけり。一年を去年とやいはん。今年とや。其わけもなく戯作者は毎時お正月の心にて、子ども土産の絵草帛年玉、月見の頃より、吉書はじめ、冬至の時は来年の新板製本調はねば、渡世とならぬ本屋の売もの、斯まで時刻を急とも知らで、ゆるゆる看官へ、風雅でもなく洒落でもなき草紙をつづりて、門口から唯おめでたふと告になん。(見返)

「お正月」「吉書」とあることから、新年正月の寿ぎの中での話が展開されると予測される冒頭となっている。なお、「吉書」とは、(1)吉日良辰を選んで奏聞する儀礼文書。平安・鎌倉・室町時代、公家、武家において、改元、年始、讓位、代替など、事が改まった時に奏聞した文書。(2)賦税を怠らないように百姓に与える定書(さだめがき)。上納の額を記す、もしくは、(1)あるいは(2)の「吉書始」の略である(注五)。そして、末尾には「風雅でもなく洒落でもなき草子をつづりて、門口から唯おめでたふと告になん」とある。そのため、「おめでたふ」と、口頭で「告」げ述べる点に重点が置かれていることがうかがえる。

一方、末尾では「めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし」(八丁裏)と、「めでたし」を繰り返す重ねた記載で締めくくられており、典型的な寿ぎの表現をとっている。

こうした叙述に照応するかのように、本作品は一丁表から縁起尽く

しの色彩を伴っている。

②ながきよのとをの眠りの皆目覚め、七福神の乗り初めの船も豊かな舵の音、空に聞くさへ麗らかな龍宮城の明けの春、千尋のさとの賑ひは、いづくも同じ魚心、水も心や有磯海、波も静かな年礼に、行き交ふ魚の尾鰭まで、春めく龍の都町、めでたいひらめをはじめとし、礼者はほうぼうめぐりつつ、いさみめきたるかながしら、屠蘇の機嫌か、うかれゆく、巷の波も穏やかなり。

(一丁表)

「七福神の乗り初めの船も豊かな舵の音」、すなわち、「七福神」とその初乗りの宝の「船」の「舵の音」が「豊か」とあるという。そうした中、「空に聞くさへ麗らかな龍宮城の明けの春、千尋のさとの賑ひ」と「龍宮城」の繁栄へと場面は移る。「春めく龍の都町」ともあり、「龍の都」、すなわち龍宮が舞台であることが示されてゆく。

ただし、浦島伝説そのものについては、「浦島太郎が人間世界より来たりし頃」との説明にとどまり、「乙姫」もその名が触れられている程度であって(二丁表)、作中では主だって活躍することはない。

その意味では、浦島伝説は、作品の舞台に資するのではあるが、「龍宮」という枠組が重視されているということになるろう。

では、浦島伝説の引用の意味があまりないのかといえ、そうでもあるまい。なぜなら、新春の寿ぎの場に、「龍宮城」「浦島太郎」「乙姫」といった言葉が用いられていることには留意しておく必要があるからである。

すなわち、近世では、浦島伝説は縁起物として享受されているのであり、老死や悔恨が色濃く滲む古代の享受とは相当に変容しているこ

とがうかがえる。これは、本作品に限らず、近世の浦島伝説享受の多くに見られる特徴と考えられる。

四 「龍宮城」への「貢」「宝物」

「四つの海静けき中に、世界第一の海の底に住む熊野鯨は、海の中に名にし負ふ名物の魚」のため、「諸国の鯨まで鯨の王様と敬」っていた。ところが、「龍宮城へ参内する時は、鯛、ほうぼう、ひらめなどが上席にて、大きななりを邪魔にされ、魚に劣る身の上を、年久しく恥ぢらひし」という境遇でもあった（一丁裏）。そこで、熊野鯨は「何とぞ我が身分を、鯛、ひらめよりも貴く用ひられる工夫はあるまじきや」（二丁表）と、他の鯨たちへ相談する。その結果、衰退していた「貢物」の献上案が浮上する（二丁表）。「諸国の宝」が集まれば「龍王」の歓心を得ることができ、その結果、「鯨仲間を魚の頭」とするだろうと目論んだのであった（二丁裏）。本話では、この熊野鯨はいわば悪役にあたる。

「諸国の宝」が集められる。「若狭の鯛の三ツ道具、伊勢の鮑の大真珠、鎌倉海老の角細工、烏賊の甲羅、蛸のとんびからすを始め、色々の珍物を運び来たれる有様は、龍宮城の賑ひ」と叙述されていて、「めでたかりる次第なり」と、その様子が祝賀を含有していることが強調される（二丁裏）。

ところが、「宝物の善し悪し」（三丁裏）を選出する熊野鯨は、「鯛の三ツ道具」を指して、「宝といふものは、金銀珠玉を第一とすべし」などと「嘲笑」う（三丁裏）。止血剤である「海螵蛸」という「烏賊

の甲羅」も、「竹島鮑の長熨斗」なども、「龍宮城では不用の品々」（四丁表）などと熊野鯨は述べる。「膾炙膾炙」、すなわち、おっとせいからの「松前昆布の極上々」も否定される。

その熊野鯨が認めたのが、「伊勢の二見が浦の鮑」（四丁裏）による「海中第一の大真珠」（五丁表）であった。「このたび集まる宝のうちにて、第一ならんと思ひたる真珠」（五丁裏）とも言及されている。

ただし、この「大真珠」は「大蛤」に奪われる（五丁表、五丁裏）。あらたに登場した鰹と鯨との波乱や蛤の追跡の後に（七丁裏、八丁裏）、「真珠」は「国の守へ差し上げ」ることとなった。

実は、これは「作者が年内へ取り越し見たる初夢」であり、「めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし」と繰り返されて締めくくられ、寿ぎのもとに本話は終了する（八丁裏）。

こうして、宝比べと、それによって龍宮内での身分が変動するといふ、魚たちの争いが繰り広げられている様子が、勧善懲悪の形式で叙述されている。近世ではしばしば目にする構成といえよう。

五 おわりに

興味深いのは、本話の後に附随している広告である。後表紙見返しは、「楊太真 遺伝」であるという「処女香」が挙げられており、「髪艶を出し 髪垢をさる」と説明されている。そして「この御薬は日本無類の妙方」であり、「男女に限らず」、その「功能」は高いのである。「楊太真」、すなわち楊貴妃にゆかりのある「処女香」とあるのだが、必ずしも女性を対象としているとは限らない。「希代の良法」で

あり「腫物」^{しゅもつ}さえたちどころに癒えるとあることから、その薬効が強調されている。

浦島伝説とはまったく無関係にうつる広告の類が、新春の寿ぎを大地とする海中世界の浦島享受作品と、書物の形状の上で繋がっていることは興味深い。

すなわち、「龍宮」を舞台とはするものの、近世になると、古代の神仙思想などに基づく浦島伝説の精神性は稀薄化してゆくことと関連している可能性があることを付言する。

(注一) 糸井仙之助編『丹後郷土資料目録(改訂版)』(舞鶴市教育委員会、一九五七年初版)。

(注二) 舞鶴市職員(二〇一七年当時)からの聞き取りによる。

(注三) 立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」(https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php 二〇二三年十一月二六日閲覧)。

(注四) 立命館大学アート・リサーチセンター(注三)データベース。

(注五) 『日本国語大辞典』(小学館)。

付、翻刻

『新春龍宮物語』

凡例

一、舞鶴市糸井文庫蔵本を底本として翻字する。立命館大学アート・リサーチセンター「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データを基本的に使用する。必要に応じて、糸井文庫蔵本を直接確認する。

https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php

一、かな遣いは底本に拠り、適宜、濁点、句読点、半濁音、引用符、改行を補う。

一、ひらがな表記を適宜漢字に改める。

一、繰り返しを示す踊り字(く、ゝなど)は、それぞれ、もとの字に置き換える。

一、促音や拗音は細字で記す。

一、漢字の字体や送りがなは、現代の一般的な用法に近づける。

一、底本にふりがながある場合、原則としてルビとして記す。

翻刻

(絵表紙)

〈新春〉龍宮物語(たつのみやこものがたり)

為永春水作

歌川国直画

(見返)

年のうちに春は来にけり。一年を去年とやいはん。今年とや。其わけもなく戯作者は毎時お正月の心にて、子ども土産の絵草昏年玉、月見の頃より、吉書はじめ、冬至の時は来年の新板製本調はねば、渡世とならぬ本屋の売もの、斯まで時刻を急とも知らで、ゆるゆる看官へ、風雅でもなく洒落でもなき草紙をつづりて、門口から唯おめでたふと告になん。

辰の春 為永春水誌

(一丁表)

ながきよのとをの眠りの皆目覚め、七福神の乗り初めの船も豊かな舵の音、空に聞くさへ麗らかな龍宮城の明けの春、千尋のさとの賑ひは、いづくも同じ魚心、水も心や有磯海、波も静かな年礼に、行き交ふ魚の尾鰭まで、春めく龍の都町、めでたいひらめをはじめとし、礼者はほうぼうめぐりつつ、いさみめきたるかながしら、屠蘇の機嫌か、うかれゆく、巷の波も穏やかなり。

かながしら「旦那、モシ、おめでたいとは、実におめへさんのこってごぜへます」。

鯛「はははは、かながしらは、だいぶご機嫌になったの」。

蛸「早く家へ帰って、おるらをあげて遊びたいものだ」。

(二丁裏)

四つの海静けき中に、世界第一の海の底に住む熊野鯨は、海の中にて名にし負ふ名物の魚なれば、諸国の鯨まで鯨の王様と敬ひけるが、龍宮城へ参内する時は、鯛、ほうぼう、ひらめなどが上席にて、大きなりを邪魔にされ、魚に劣る身の上を、年久しく恥ぢらひしが、この春、諸所の浦々の鯨が年始に來たりしを幸いと、多くの鯨を集めて、「我々が仲間には、海の中にて第一の勢ひあるのみならず、人間

(二丁表)

世界の重宝となること、その数々は数の子の数にも勝る徳を備へたり。しかれども龍宮城にては、鯛、ひらめ、ほうぼうなどを、我々が上座に置きて卑しめられる、こころよからず。何とぞ我が身分を、鯛、ひらめよりも貴く用ひられる工夫はあるまじきや」と相談すれば、肥前平戸の大鯨、進み出でて、「なるほど、ご尤もなること、それには思ひついたる謀あり。かの都には浦島太郎が人間世界より來たりし頃、乙姫の政道に

■ よって、久しき間、下知行き届かず、今の龍王、よく大海を治め

らるれども、諸方の貢物絶へて、ただ南海の物成りばかりゆへ、いさ
さか不足のこともあるべし。今、諸方の浦々へ、貢物、昔の如く龍宮
城へ次へ

(二丁裏)

続き 奉るべしと言ひ遣はし、また龍王へそのことを告げて、この貢
を司り、諸国の宝を集めることを催し給はば、龍王も喜び給ひて、自
然と鯨仲間を魚の頭とし給はんこと、請け合いなり」と言ひければ、
熊野鯨は大きに喜び、すぐさまそのことを謀りしかば、大千世界の鱗
ども、龍王の勅詔に是非なく、宝物を携へて、鯨のかたへ諸国より次
第次第に集まりければ、まづその宝を数ふるに、若狭の鯛の三ツ道具、
伊勢の鮑の大真珠、鎌倉海老の角細工、烏賊の甲羅、蛸のとんびから
すを始め、色々の珍物を運び来たる有様は、龍宮城の賑ひと、めで
たかりける次第なり。

(三丁表)

貢の玉

新玉の春より精を出しなば龍の顎の玉も得つべし

(三丁裏)

ここに大海一、熊野鯨は龍宮へ貢を奉らせんと思ひたち、龍王の勅詔
にて諸国の浦々の魚に触れて宝物を集め、その身は上座にありて、宝
物の善し悪しを選び、「この度、貢の品の高下によって位を定め、龍
宮の席の次第をも改めらるることなれば、おのおの、さやうに心得ら

れよ」と座中をきつと見渡して、「まづ、魚の位の順番なり」とて、
第一番に鯛の三ツ道具を差し出だしければ、鯨はからからと嘲笑ひ、
「それ、宝といふものは、金銀珠玉を第一とすべし。

(四丁表)

何ぞや、この三ツ道具を第一に宝として披露に及ぶことをかしさよ。
その次なるは烏賊の甲羅か、血止めの薬になるばかり。海鰓蛸ぞ、本
草に載せられたりとも、生薬屋で、めったに売れぬ、らうづ物、これ
も宝といふべきや。竹島鮑の長熨斗も、龍宮城では不用の品々。興津
鯛も丹後鰯も、これぞといふ宝はなし。能登の鯖も磐城のうきぎも名
ばかり高く、これぞといふうまみもあらぬ宝物、何が貢と分くらぬ品々」
と、もとより鯨は魚仲間の ▲

▲ 威勢をくじく心なれば、皆悉く誇るのみ。折から遅れて差し出だ
すは 次へ

(四丁裏)

つづき 松前昆布の極上々、これぞ鰓膾の貢なり。鯨はこれをつく
づく見て、「鰓膾の貢物、人間世界に重宝の食物、龍宮城にても水
除け囲ひの榮螺にもなるべきものにて、その益なしとは言はれねど、
魚についたる宝でなし。ただし、昆布は鰓膾の持ち物なるか、鰓膾
膾の作るものか。かかる品々を貢となさば、品川海苔も相良布も言ふ
に及ばず、海草は皆悉く貢とするか」と、きめつけられて、鰓膾は
たける心をおししづめ、無念をこらへてゐたりける。かかるころへ、

門番の小鯨は馳せ来たり、「ただ今、伊勢の二見が浦の鮑のかたより注進あり」と告げる折から、鮑の早打ち、鯨の前に跪き、息もせわしく見へたりける。その時、鯨は鮑に向かひ、

(五丁表)

「慌ただしき注進は何事ぞ」と尋ねれば、鮑は「さん候さん候。さて我々、主人と共に、二見の浦より泳ぎだし、海中第一の大真珠を守護しつ、磯辺伝ひに志摩の国鳥羽の沖まで出でたるところに、いつのころよりか待ち伏せしたる大蛤、蜃気楼を吹き出だして、我々が眼をくらし、種々様々の形を現はし、果ては四方をくらし、鼻先までも」

次へ

(五丁裏)

つづき 潮煙苦潮しほけりにかしほを用意して、我々に浴びせかけ、その間に宝を奪ひ取り、手勢を連れて、いづくの海へか逃げ去りて、さらに行方は知れ申さず」と報せに、鯨をはじめ、なみゐる魚は顔見合はせ、暫く言葉もなかりしが、鯨は言葉を正しくして、「このたび集まる宝のうちに、第一ならんと思ひたる真珠を、蛤に取られて、そのままに済むべし」と、暫く酒宴を催ふしける。

蛤めが謀にて主人を失ひし注進。

(六丁表)

汐登る越こしの湖近ければ蛤もまた揺られ来ぬらん

貝拾ひ

(六丁裏)

ここに龍宮城へ貢をあげることを熊野鯨が催して、数多の魚を集め宝を調べけるが、その内心は、鯛、ひらめをはじめ、ほうぼう、かながしら、鱧、さより、石持ちなど、上品なりと貴まるるを憎み、その身が魚の頭と敬はれんとする謀なれば、いづれの宝をも見けなして、誹り辱めけるが、鮑の真珠ばかりは大千世界に重宝のことなれば、さすがに難癖もつけられまじと、心にかかりたるところへ、志摩の国鳥羽の沖にて蛤のために真珠を取られたりと聞きて、おもてには驚き、内心には喜びける故、酒宴を催して魚仲間の者を馳走し、さてその後、言ひ出しけるは、「この度、龍宮城へまゐらす貢の宝の高下によって、おのおのの位をも改めらるることなれば、いづれもその心得をいたされよ。第一、鯛はこれまで魚仲間の頭のごとく用ひられし身分にて、宝物は持ちもせず、その身の仲間か、黒鯛もえしれね三ツ道具をもって宝物とは、ことをかしや。そのほかは、なほ言ふにも足らず、ことに宝物を」

▲ 少しも持たぬ者どもは、鯛、ひしに同じこと、皆々、覚悟

数千匹の小魚こうを、鯨にきめつけられて平伏してゐる。

(七丁表)

致すべし」と座中を見渡し、一呑みと口を明きたる勢ひに、鯛はもとよりあまたの魚は、おのおの縮みゐたりける。鯨は既にこの度より

次へ

鯛が曰はく、「作者めが呉越軍談をまるばめにして、おいら達をよわよわしく見せあがる」。

(七丁裏)

つづき

龍宮城へ赴きても、我が思ひつきたる貢の褒美に、我を重く用ひらること必定なりと、笑みを含みゐたりければ、さすがの鯛も黙然と萎れてゐれば、その外の小魚どもは、見るかげもなく、しょげゐたり。その折から、潮風の音すさまじく聞こえ、門番の小鯨を追ひ散らし、およそ五六千匹の大鯨、いづれもいさみの出で立ちにて、どやどやと馳せ来たり、なんの遠慮もあらばこそ、つかつかと進み寄り、多くの鯨の中にも、鎌倉生まれの江戸前育ち、勇み肌なる大鯨、鯨に向かつて太平楽、「モシ鯨さん。今度、御前が宝物を集めて龍宮城へ差し上げるといふことだが、そのことについて龍王様も、またまた色々御苦労なされて、わしらが仲間へ言いつけ

「呉越軍談の伍子胥がはりの鯨だぞ。なんと強からう」。

(八丁表)

られて、宝物をば御前の手から集めて上げるには及ばぬから、上下も

大小も選みなく、昔から持ち伝へてゐるものを、纔かでも印ばかりでも上げれば、この貢から争ひでも出来てはならぬ、早くその方達から鯨のところへ言ひ渡せと仰せつけられました。そのつもりになせへまし。○サアサア、ここへ来てゐる魚たち、早く国々へお帰りなせへ」と言へば、喜ぶ鯛、ひらめ、黄泉路帰りし心地にて泳ぎ出でるを、鯨は腹立ち、すでに鯨と争はんとおこりたつ。そのところへ踊り出でたる鯨が鯨を睨み声高く、「龍王の御下知、鯨の

つぎへ

「鯨も恐れて呆れる」。

(八丁裏)

続き

挨拶用いられずは、わらはが役目、その元の腹へお見舞ひ申さん」と言はれて、鯨は色白ざめ、言句も出でぬそのなりさま。鯨は数多の魚を国々へ帰し、その身は蛤の行方を尋ねて追っかけ追ひつめしかば、蛤は海の中にたまりかね、潮干の砂地へ逃げ上がりしを、蟹の子供が大勢にて見つけ、頓て捕へて真珠を取り、国の守へ差し上げれば、これより蛤にも自然に真珠が出来しとぞ。これは作者が年内へ取り越し見たる初夢なり。めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし、めでたし。

国直画

春水作

(後表紙見返)

楊太真 遺伝 処女香

精製桐箱入

一廻り 百十二文

この御薬は日本無類の妙方にて、男女に限らず、顔の艶をうるはしくして、色を白くし、肌目細になる功能あり。但し世間に普通たる品とちがひ、ただ一回用ひ給ふとも、忽に功能のあらはれる事、希代の良法なり。一廻り用ひ給ひては、色自然と桜の如くなり、二廻りにて、いかなる荒症の御方も、羽二重の如き肌となる。其外、御顔の腫物一切に奇功ある事、神の如し。

髪かみの艶つやを出し 髪垢ふけをさる

妙薬 初みどり このくすりは、髪をあらはずに、あらひしよりもう

つくしくなるこのうあり。

代三十六文

売弘所

書物并絵入読本所 江戸京橋弥左エ門町東側中程

文永堂 大島屋伝右衛門

謝辞

資料掲載を許諾した舞鶴市へ謝意をあらわす。名古屋大学名誉教授の塩村耕氏へ謝意をあらわす。本研究はJSPS科研費JP21K00294(日本学術振興会科学研費助成事業基盤研究(C)「海洋文化圏から見る浦島伝説の宗教観」研究代表者 畑恵里子)、および、立命館大学アート・リサーチセンター国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」国際共同研究課題(研究設備・資産活用型)採択課題(研究代表者 畑恵里子)の成果の一部である。